Osaka Gakuin University Repository

Title	J. D. Salinger “Uncle Wiggily in Connecticut” 研究 Walt の「教え」と「隻手音声」 A Study of J. D. Salinger’s “Uncle Wiggily in Connecticut”: ‘One Hand Clapping’ and Walt’s ‘Teachings’
Author(s)	山口　修 (Osamu Yamaguchi)
Citation	大阪学院大学　外国語論集（OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 74 号：1-18
Issue Date	2017.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

大阪学院大学 外国語論集
第74号　2017年12月

J. D. Salinger “Uncle Wiggily in Connecticut” 研究
Walt の「教え」と「隻手音声」

山　口　　修

序

J. D. Salinger（1919-2010）の短編集 *Nine Stories*（1953）に収録された “Uncle Wiggily in Connecticut”（雑誌掲載1948、以下、“Uncle Wiggily”）の主人公 Eloise は、夫や娘との関係がうまくいかず日々の生活に満足できずにいる。しかしある日、娘 Ramona の寝姿を目にしたとき「悟り」を体験し、娘への愛情を取り戻す。その後の Eloise の成長については批評家により評価が分かれているが、少なくとも Ramona への愛情が示されたという点で、その体験が彼女にプラスの精神的変化を引き起こしたことは間違いない。彼女を「悟り」へと導いたのは昔の恋人 Walt の存在であり、彼の言動の中にその成功の要因がある。Eloise に影響を与えた Walt の振る舞いは、短編集冒頭に掲げられた “We know the sound of two hands clapping.　But what is the sound of one hand clapping?” という「隻手音声」と呼ばれる公案 ― 禅宗で、参禅者に考える対象や手がかりにさせるために示す、祖師の言葉・行動（『大辞泉』）― と関連づけられるのではないかと考える。本論では、Eloise の精神的成長に影響を与えた Walt の「教え」とはどのようなものだったのか、また Walt の「教え」と「隻手音声」のエピグラフがどのように結びつくのか考えてみたい。

1

まず、Eloise がおかれた状況をみていこう。Paul Levine が “The story . . . concerns not only the loss of love and communication but, most of all, the loss

of innocence”（110）と指摘するように、Eloise は夫や娘との間の愛情やコミュニケーションを失い、物質的には恵まれながらも満足を得ることができない。そして、素直に人を愛するという純真さも失っている。その結果、酒や煙草に依存するような俗物的な生き方をしており、精神的に不安定な状態にある。その不安定さが、娘 Ramona や家政婦 Grace へのイライラした態度に表れている。また Olivia C. Edenfield が、“She［Eloise］appears to be trapped in a neighborhood without anyone to whom she can connect, in a marriage that does not fulfill her, with the expectation that she should mother a child she is too depressed really even to see, much less love”（296）と述べるように、空間的に“confinement”（296）の状態にある。また、友人の Mary Jane との交流も、彼女が訪問の途中で道に迷ったことからもわかるように、それほど頻繁に行われていたわけではない。話題も近況報告ではなく古い友人たちのことであり、彼女が時間的にも過去に“confinement”されていることが暗示されている。このような閉塞状況におかれた Eloise がどのように“mother a child”、つまり Ramona への母親としての愛情、役割を自覚していくのかという点に注目したい。

Eloise と Ramona の母子関係について詳しく見ていこう。Eloise と Mary Jane とのおしゃべりの最中、Ramona が帰ってくる。

> . . . “Is that you, Ramona?”
>
> “Yes,” a small child’s voice answered.
>
> “Close the front door after you, please,” Eloise called.
>
> “Is that Ramona? Oh, I’m dying to see her. Do you realize I haven’t seen her since she had her ― ”
>
> “Ramona,” Eloise shouted, with her eyes shut, “go out in the kitchen and let Grace take your galoshes off.” . . .
>
> “How’re her eyes now?” Mary Jane asked. “I mean they’re not any

worse or anything, are they?”

“God! Not that I know of.”

“Can she see at all without her glasses? I mean if she gets up in the night to go to the john or something?”

“She won’t tell anybody. She’s lousy with secrets.”（24-25）

Ramona に会うことを切望する Mary Jane と、娘を見ることすらうんざりだとでもいうように目を閉じて Ramona に叫ぶ Eloise が対照的に描かれている。寒風吹く中帰ってきた Ramona への態度や、娘の眼への無関心さから、Eloise は母親として失格であるといわざるを得ない。

娘の Ramona は秘密をたくさん抱えているが、その秘密は本来母親である Eloise に伝えられるべきものである。しかし、娘への関心が薄い母親はそれを聞こうとせず、Ramona はそれらを自らの内にため込んでいかなければならなかっただろうと推測される。Ramona が Mary Jane に “I don’t like to kiss people”（25）というのも、他者との交流を拒絶する母親の態度の反映であり、William Wiegand が “Eloise’s unhappiness affects others”（128）というように、Eloise の生への消極的態度が、幼い Ramona にも大きな影響を与えている。Ramona は Jimmy Jimmereeno と行動を共にするが、彼は、母親とうまくコミュニケーションがとれないために Ramona によって創造されたイマジナリーフレンドといえる存在である。そのような Jimmy に対しても、Eloise は関心を示さない。Jimmy が車にひかれたという、Ramona にとって重大な報告も聞き流し、彼女を Grace の元へ送りこんで寝かしつけてしまう。Ramona は母の関心をひくことができず、“slowly giant-stepped her way out of the room”（34）と、怒りと抵抗を示しながら部屋を出て行くが、それ以上のことは何もできない。

しかし、Eloise と Ramona のその疎遠な母子関係は、物語の終盤、Eloise が Ramona が寝ている二階の部屋で大きく変化する。

> Then, suddenly, she［Eloise］rushed, in the dark, over to the night table, banging her knee against the foot of the bed, but too full of purpose to feel pain. She picked up Ramona's glasses and, holding them in both hands, pressed them against her cheek. Tears rolled down her face, wetting the lenses. "Poor Uncle Wiggily," she said over and over again. Finally, she put the glasses back on the night table, lenses down.（37）

その瞬間を高橋美穂子は次のように説明する。

> Eloise が長いあいだ、真暗な入り口にたたずんでいたのは、彼女に次々と新たな認識が襲ってきて動けなかったからである。とりわけ Ramona が、新たに空想上の恋人 Mickey Mickeranno を創出しなければならなかった理由を翻然と悟り、自分とまったく同じ孤独を苦しんでいることに、はじめて気がついたからである。（98）

後に見るように、自分と Ramona が同じ境遇にあることに気づいたこと、これが Eloise の「悟り」であったことは間違いない。その際、彼女が Ramona 本人に駆け寄るのではなく、Ramona の眼鏡を手にし、"Poor Uncle Wiggily"（37）と繰り返したことは、この「悟り」に Walt の影響が大きかったことを示している。この"Poor Uncle Wiggily"という台詞は足首を捻挫した Eloise をいたわる Walt の優しさを象徴する言葉である。彼女は Ramona よりも、まず先に Walt の言葉に自分の気持ちを向けたのである。

そこで、次に Walt とはどのような人物であったのか、またどのような影響を Eloise に与えたのかを考えていきたい。

2

この疑問を考えるために、エピグラフに掲げられている"We know the

sound of two hands clapping. But what is the sound of one hand clapping?”（「隻手音声」）を一つの手がかりとしたい。少々回り道になるが、そもそも「隻手音声」という公案がどのようなものか見ていくことにする。[1]

この公案は日本人禅僧白隠慧鶴（1685-1768）が作ったものである。白隠は長年の修行の末、42歳の時「豁然として大悟」（芳澤 2016、23）し、衆生の教化へ力を注ぐようになる。禅宗においてその教義は不立文字とよばれているように、言葉では表現できないものとされる。この言葉にならない悟りの境地を衆生に教えるための方便として作られたのが「隻手音声」である。

では、「隻手の音声」を聞くとはどのようなものなのだろうか。以下、白隠の言葉を現代語訳で引用する。

> 隻手の工夫とはどういうことか。今、両手を相い合わせて打てば、パンという音がするが、ただ片手だけをあげたのでは、何の音もしない。……
> この隻手の音は、耳で聞くことができるようなものではない。思慮分別をまじえず五感を離れ、四六時中、何をしている時も、ただひたすらにこの隻手の音を拈堤して行くならば、理屈や言葉では説明のつかぬ、何とも致しようのない究まったところに至り、そこで忽然として生死の迷いの根源、根本無明の本源が破れる。……いつしか、意識の根源は撃砕され、この迷いの世界もまた根本から粉砕されており、ありのままの真実を見届け、行動する智恵がそなわり、一切を正しく見透すことのできるもろもろの智徳の力がそなわっていることを確信できるのである。（芳澤 2001、9-10）

本来、不立文字とされるものだけになかなかその本質を理解することは難しいが、これに先立って述べられた以下の文章を読めば、「隻手音声」が行き着く先が、「山川草木悉皆成仏」の気づきであり、一切が「空」であるとする仏教の教えに通じるものであることがわかる。

……何としても一回、自性本有のありさまを、ご自分ではっきりと見届けること、このことが何にもまして肝要なことなのです。

その自性本有のありさまは、どうして見届けることができるか。……

どうしたら、その大悟の歓びを味わうことができるか。大疑の下に大悟有り、と申しますように、大疑団をおこすことです。今、この文を読んでいる、その主体は何か。日常生活においても、笑ったり悲しんだり、外界の事象にそれぞれ応じて働いていくもの、それはいったい何ものか。これは心か、性か。そのものは青黄赤白の色があるのか。内にあるのか外にあるのか、それとも中間にあるのか、と。その根源を、何としても一回、はっきりと見届けずんば措くまじと、一日中、絶え間なく励み進むならば、いつしか、あれこれ妄想し思う心もなくなり、一切の疑団もなくなり、一念も生ぜず、男でもなければ女でもない、賢くもなければ愚かでもない、生もなければ死でもない、心はひたすらカラリとして、昼夜の分かちもなく、心も身体もともに消え失せたような、そういう心境を、幾度も味わうことがあるでしょう。(芳澤 2001、4-5)

我々が当たり前のものとして経験していることを相対化し、その見方が主観によって引き起こされたものであること、あらゆるものはその実体をもたない「空」であることに気づくことが仏教の「悟りの境地」であり、白隠もまたそのことを意識していたと考えられる。もちろん、そこに至るまでには長い年月の修行が必要であり、凡夫が簡単に到達できるものでないことは言うまでも無い。

だが一方で、白隠は先に見たように衆生も悟れると考えており、そのための手段として「隻手音声」が考案された。沖本克己は、白隠のいう菩薩は、「まず自らが悟ることに眼目をおいて」おり、「真の悟りを得るためには自らの日常に全身全霊で打ち込むことが肝要」(247) で、「自らを、そして自らの行なっていることを信じること、つまり『自信』を持つということに尽きる」(249)

と解説する。日々の生活を真剣に生き、その中で「悟り」の道を切り開くことが白隠の菩薩道であり、そのための手段として日々隻手の音声を方便として、その音を聞き続けよといっているのだ。

日常生活が修行の場となる理由については、中村元の次の説明が参考になるだろう。

> 「われわれは迷いの世界にいる、輪廻のうちにある。かなたに涅槃（ニルヴァーナ）の理想の境地がある。けれども、よく考えてみると、どちらも本質においては空である。空であるからこそ、目的を達成することができる。本質は異ならぬものである」と。
>
> そう考えますと、「われわれの現実の日常生活が、そのまま、理想的な境地としてあらわし出されねばならない」ということになります。……理想の境地をめざす動き、空の実践は慈悲行となってあらわれますが、それは現実の人間生活を通じて実現されるものであります。(40)

高橋はSalingerが「隻手音声」をエピグラフに掲げた理由を、主人公たちがあるきっかけを得て、「一つの悟りの瞬間を体験し迷妄から解放される様子を描きたかったから」(66）だとしている。増谷文雄は、初期仏教経典のある偈を説明する中で、仏教の本質を次のように説明する。

> それは、けっして、自我を圧殺せよ、自己を忘却せよと語っているものではない。それどころか、この偈の語るところは、自己の人間形成のために全努力を集中せよというのであり、かくしてみごとな自己形成がなった時、そのとき、人ははじめて得がたい依処をうるのだという。いや、そもそもが、仏教は本来、人間形成、自己確立を説く宗教のほかのなにものでもないのである。(増谷1996、145)

ここに述べられているように、仏教本来の教えが、「人間形成」、「自己確立」であるとするならば、Salinger が「隻手音声」を掲げたのは、主人公たち（ここでは Eloise）が迷妄から解放され、「自信」をもって生きることで、新たな自己認識を得ることを暗示するためであったと考えてよいだろう。[2]

このような白隠の考えを元に「隻手音声」を、次のように考えておきたい。一つは仏教の「空」の思想を念頭にいれながら、既存の見方へ懐疑を抱き新たな認識を得るための手段として、もう一つは、そこに至るために特別な修行を行うのではなく、日常の生活の中にその契機を見出すための手段として考えたい。主人公たちの「悟り」とは、「隻手音声」を聞くことで、日常のふとした瞬間に、思慮分別と五感の世界から解き放たれ、「なすべきことをなした」（鈴木 32）という「自信」をもって生きることで、新たなものの見方、新たな意味を獲得することなのである。

3

それでは、“Uncle Wiggily”に戻ろう。Walt とはどのような人物であったのか、またどのような影響を Eloise に与えたのかという疑問であった。Eloise が Walt について言及するのは、主に「“Poor Uncle Wiggily”と語りかける場面」、「徴兵直後の列車内での会話」、「軍隊での昇進について」、「彼の死の原因について」の４つである。ここでは、「列車内」と「昇進」について、詳しく検討してみたい。二つの場面を引用しておこう。

> “Well, he［Walt］sort of had his hand on my stomach. You know. Anyway, all of a sudden he said my stomach was so beautiful he wished some officer would come up and order him to stick his other hand through the window. He said he wanted to do what was fair. Then he took his hand away and told the conductor to throw his shoulders back. He told him if there was one thing he couldn’t stand it was a man who didn’t look

proud of his uniform. The conductor just told him to go back to sleep.”(30)

Eloise laughed suddenly, from her diaphragm. “You know what he [Walt] said once? He said he felt he was advancing in the Army, but in a different direction from everybody else. He said that when he’d get his first promotion, instead of getting stripes he’d have his sleeves taken away from him. He said when he’d get to be a general, he’d be stark naked. All he’d be wearing would be a little infantry button in his navel.”(30)

二つの場面がどちらも服装に言及しているという点に注目したい。一方で車掌には制服に誇りを持てといいながら、軍人である自分は制服を捨て裸になるという、これらの Walt の発言は矛盾しているように思われる。では、この矛盾をどのように理解したらよいのだろうか。また、先に述べたように Eloise がこれらの発言に触発されて「悟り」を得、救済されたのだとすれば、それはなぜなのか。

服はそれを身に纏うことによって、身体 / 本体を覆い隠す役割を持っている。逆にいえば、服によって本体を偽ることも可能になる。つまり服と本体との関係は、恣意的なのである。もし車掌の服を着た人物が本体を偽り隠していたとしたらどうなるのか。そのような人間は悟りに至ることはできないし、そもそも社会にあっては失格といわざるを得ない。なぜなら、先に述べたように「真の悟りを得るためには自らの日常に全身全霊で打ち込むことが肝要」(沖本 247) であり、「自らの行っていることを信じること」(249) ができなければならないからだ。車掌が悟りを求めていたかどうかはわからない。だが、「霊的成長」を求める「求道者」(高橋 94) である Walt は、人間たるものその日常にあって常に「自信」をもち、正しく生きるための努力を怠るなという思いをこの言葉に込めたと考えられる。[3]

一方で「求道者」Waltは、その「日常の悟り」の次の段階へ向かう。これは白隠が禅の目的は衆生済度であり個人として悟りを開いたとしてもそれで終わりではないと考えることと通じる。軍服への言及は、Waltが服装という手段によって偽った仮の姿ではなく、剥ぎ取られた裸の姿、あらゆるものが実体をもたない「空」の状態で全てを判断されることを望んでいることを示している。つまり、霊的成長をした人間は外見で判断されることはなく、その本体/本質によって理解されるだろうという彼の理想を語ったものではないだろうか。[4]

「車掌の制服」や「軍服」がその服を着る人物を表徴する。しかし、その姿を見る者の多くはその服装に惑わされ、ことの本質（本体）を見誤る。一方で、制服を纏う側はどうか。自己を偽ってはいないか、というのがWaltの問いかけだ。Waltにとって霊的成長とは、物事の本質に気づくことであり、その本質に相応しい振る舞いをすることなのである。一方でWaltにとってそれは、人々に既存の見方に対して懐疑を抱かせ、新たな認識を得させるための手段でもある。このように見ていくと、Waltの発言は決して矛盾するものではないことがわかる。日常を生きる衆生として、日々自分のなすべきことに「自信」と誇りをもちそれに励むことで悟りを開けというWaltは、悟りを開いた後、白隠の「衆生済度」を実践するかのようにEloiseを救済するのである。

もう少しWaltについて見ていこう。新田玲子は「列車内」のWaltの行動を次のように説明する。

> エロイーズのお腹に置かれた片方の手が感じる幸福は私的な喜びである。それがあまりに大きいとき、ウォルトはもう一方の手を、＜窓＞の外に出すことで均衡を保とうとする。……しかも列車の＜窓＞から外は風が吹きすさんでいるし、命令を下すのが士官であることから、＜窓＞から出される手が体験するのは戦争のような過酷な状況であろう。(75)

そして、James Lundquist を引用し[5]、このような Walt の姿勢が「二極一致」という仏教概念で説明される（76）と指摘し、Walt が透徹した「鋭い認識力」をもつと同時に、それを「暖かく優しい人間的な好ましさに包み込む力を持っている」(76）と述べ、「ものの本質を見抜く能力と、その能力に押し潰されない人間的な資質の両方を、非常に良い形で共存させる稀な存在である」(77）と述べている。

では、Eloise に物事の本質を見抜く力はあるのか。彼女は母親という役割を担った存在であるにもかかわらず、“‘Ramona,’ Eloise shouted, with her eyes shut”（24）とあったように、そもそも娘を見ようとしていない。見たとしても、“She［Ramona］looks like Lew. When his mother comes over, the three of them look like triplets”（24）と完全に外見に囚われてしまっている。夫 Lew への愛情が感じられないため Lew とそっくりな Ramona を Lew と同一視してしまい、Ramona 本体を見ることができないのだ。見ているのに見ていないという、まさに公案のような状況に Eloise はおかれている。また先に述べたように、彼女は過去の世界に囚われているため、現実を見ることができない。冒頭で彼女がキャメルのコートを着ていることも、彼女がそのコートを纏うことで自らの物質的満足感を表そうとしつつも、逆に精神的満足感が得られていないことを隠しているようにしか見えない。服装（記号）と彼女自身（本体）が一致していないにもかかわらず、彼女はそれに気づいていないのである。Walt 的視点からいえば、外見に囚われ服によって自分の本心を隠そうとする現在の Eloise の姿は、霊的成長からはほど遠い状況にあるといわざるを得ない。

母親から見られることのない Ramona が置かれた状況を Edenfield は、“her［Ramona’s］eyesight symbolizes both her mother’s and her own inherited inability to see beyond their immediate pain and isolation”（307）と述べている。お互い理解できず、孤独であり、この状況を乗り越えられないという点では、Eloise と Ramona はパラレルな関係にある。これは、Ramona が孤独から Jimmy（車にひかれた後は、Mickey Mickeranno）を生み出したのと同様に、

Eloise も孤独であるがゆえに Walt との思い出に浸っているところにも表れている。しかも、その悲しみを Ramona 同様誰とも共有できず、抱え込んだままでいる。冒頭で見たような閉塞状況の中でこのような時間と空間にとらわれて近視眼的な見方しかできない Eloise は、物事の本質に対する深い洞察力をもつ Walt と対極の位置にあるといってよいだろう。

しかし、Eloise は Walt の言動を思い出すことによって、隻手の声を聞く。増谷は「『さとり』というものは直感である。直感というものは受動性のものである」(増谷 1979、22) と述べているが、その瞬間は突然訪れる。Eloise/Walt と Ramona/Jimmy (Mickey) との関係、つまり、亡くなった Walt の思い出を Lew に共感してもらおうとした自分と、Jimmy を殺すことで母親の共感を得ようとした Ramona が同じだと気づいたとき、Eloise に変化が起こる。彼女は Ramona の眼鏡に駆け寄ると“Poor Uncle Wiggily”と繰り返し、眼鏡を置いて Ramona にキスをする。ここでようやく Eloise は、自分が母親としての役割を果たしていないことに気づくのである。彼女がつるを下にして置いてあった (“folded neatly and laid stems down” (36)) Ramona の眼鏡を、その後レンズを下にして置く (“put the glasses back on the night table, lenses down” (37)) のは、高橋が「レンズに Ramona の視線を感じ、このレンズを通して Ramona が見てきたいままでの自己を否定したい」(99) からと述べているように、これまでの自分とは異なる自分になるという Eloise の決意表明といえるだろう。

こうして Eloise は時間と空間に“confine”され、Walt が求めていた自分の生き方への「自信」ももてず、自分の役割を果たすこともできずにいたことに気づくことで、Ramona を愛する母親としての素直な感情、イノセンスを回復するのである。

結論

以上見てきたように、Eloise が母親としての役割に気づくためには、Walt

の存在、「教え」が不可欠であった。Walt は「隻手音声」を聞ける人物であり、「隻手音声」を「霊的成長」の手段として、「ものの本質を見抜く能力」と「その能力に押し潰されない人間的な資質」（新田 77）をもつバランスの取れた自己を確立し、白隠のいう「悟り」の境地に到達し、そして、Eloise を救済することになった。車掌の制服に象徴される、与えられた役割をしっかり把握し、任務を全うすることを Eloise に示すことで、彼女もまた母親としての自分の立場を認識することの重要性に気づくのである。また、最後の場面で “brown-and-yellow dress” に Eloise が言及し、“‘I was a nice girl, . . . wasn’t I?’”（38）と語るのは、彼女が素直に人を愛せる生き方をしていた過去を振り返り、服（記号）と自分自身（本体）との新たな一体化、つまりこれまでの価値観にとらわれることのなく「一切を正しく見透」せるような素直な、「空」なものとしての自己のアイデンティティを取り戻そうと意識し始めたことを暗示している。Lundquist のいう “apprehending the nature of the self”（75）という作用が Eloise に働き始めたといえるのかもしれない。

注

1　James Lundquist は公案の目的について、“its purpose is to profoundly acquaint the student with a way of thinking, a way of apprehending the nature of the self that is actually based on a theory of knowledge or what can be known”（74–75）、“The *koan* is the method by which the Zen master ‘instructs’ the student away from conventional knowledge and reliance on wrong-thinking”（76）と説明している。

2　鈴木大拙は、「釈尊の涅槃は、『是生滅法』ということよりも、『なすべきことはなした』という、いかにも平和な落ち着いた心持を、仏教では象徴しているように、自分は感ずるのである」（32）と述べている。涅槃の境地などといわれると、凡人にとって「悟り」は不可能のように感じられるが、このように考えると衆生を日常生活の中で「平和な落ち着いた心持」

（「悟り」）へ導くことの可能性が見えてくる。

また、Kenneth Slawenski は、「［Salinger が］禅の思想を、芸術は精神性と結びついているという自分自身の確信と統合させるとき、それが執筆と瞑想はおなじものだという信念を生んだ」（295）と述べているが、これもまた「真の悟りを得るためには自らの日常に全身全霊で打ち込むことが肝要」（沖本 247）とする白隠の教えに通じるように思われる。

なお Slawenski によれば、Salinger は「1946年後半には、禅や神秘カトリック教を研究しはじめて」（241）おり、1950年には「鈴木大拙と知り合いに」（295）なっている。ケネス・スラウェンスキー『サリンジャー　生涯91年の真実』（田中啓史訳 晶文社 2013）参照。

3　高橋は、「おのれに課されたつとめを、ひたむきに果たすことの大切さを語っている」（94）と説明している。

4　Walt の “He said when he’d get to be a general, he’d be stark naked. All he’d be wearing would be a little infantry button in his navel”（30）という姿は、我々がもつ “general” のイメージとの間にずれを生じさせ、一瞬我々の思考を停止させるという点で、公案に通じるものがある。本論からは少しそれるかもしれないが、Walt の死が、兵士であるにもかかわらず、「戦闘中」での「戦死」ではなく、「終戦後」の「事故死」であったという点も、Walt の特異な存在を象徴してるように思われる。

5　引用箇所は以下の通り。

. . . Walt was expressing a *koan* of sorts, reflecting the Buddhist conception of the duality of opposites, that there are pleasures so great that the only way they can be comprehended is through contemplation of pain that would be equally great.（88）

引用文献

Edenfield, Olivia C. “Uncle Wiggily’s Haunted House.” *Teaching Salinger’s* Nine Stories. Ed. Brad McDuffie. Wickford: New Street Communications, LLC, 2011.

Gwynn, Frederic L. and Blotner, Joseph L. “One Hand Clapping.” *Salinger: a Critical and Personal Portrait*. Ed. Henry A. Grunwald. New York: Harper & Row, Publishers, 1963.

Levine, Paul. “J. D. Salinger: The Development of the Misfit Hero.” *J. D. Salinger and the Critics*. Ed. William F. Belcher and James W. Lee. Belmont: Wadsworth Publishing Company, Inc., 1964.

Lundquist, James. *J D. Salinger*. New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1985.

Salinger, J. D. “Uncle Wiggily in Connecticut.” *Nine Stories*. Boston: Little, Brown and Company, 1991.

Wiegand, William. “The Knighthood of J. D. Salinger.” *Salinger: a Critical and Personal Portrait*. Ed. Henry A. Grunwald. New York: Harper & Row, Publishers, 1963.

沖本克己『泥と蓮　白隠禅師を読む　座禅和讃　毒語心経　隻手音声』大法輪閣 2007年

鈴木大拙『禅とは何か』角川ソフィア文庫 2004年

高橋美穂子『J. D. サリンジャー論 「ナイン・ストーリーズ」をめぐって』桐原書店 1995年

中村元『仏典をよむ３　大乗の教え（上）ー般若心経・法華経ほかー』岩波書店 2001年

新田玲子『クラフツマン・サリンジャーの挑戦　サリンジャーなんかこわくない』大阪教育図書 2004年

増谷文雄『釈尊のさとり』講談社学術文庫 1979年

増谷文雄・梅原猛『仏教の思想１　知恵と慈悲＜ブッダ＞』角川ソフィア文庫 1996年

松村明監修『大辞泉』小学館 1995年

芳澤勝弘『白隠禅師法語全集　第十二冊　隻手音聲　三教一致の辯　寶鏡窟之記　兎専使稿』禅文化研究所 2001年

――『白隠　禅画の世界』角川ソフィア文庫 2016年

A Study of J. D. Salinger’s “Uncle Wiggily in Connecticut”: ‘One Hand Clapping’ and Walt’s ‘Teachings’

Osamu Yamaguchi

Eloise in J D. Salinger’s “Uncle Wiggily in Connecticut” lives her loveless life with her husband, Lew, and her daughter, Ramona. One day, seeing Ramona sleeping on one side of the bed, she suddenly has a *satori*, or an epiphany. Before she rushes to her daughter, she picks up Ramona’s glasses, and says “Poor Uncle Wiggily,” which are the words her ex-boyfriend Walt said to her when she hurt her ankle. This indicates that Walt has something to do with Eloise’s *satori*. This paper shows what Eloise’s *satori* is, how Walt’s words and actions lead to Eloise’s epiphany, and how a *koan,* ‘one hand clapping,’ which is the epigraph of *Nine Stories*, relates to Walt’s way of living.

The ‘one hand clapping’ is originated by Hakuin, a Japanese Zen Buddhist. According to F. L. Gwynn and J. L. Blotner, the purpose of a *koan* is “to stir up and readjust one’s view of things,” and it is a method to learn a way of apprehending the nature of the self while striving every day of one’s life. Hakuin especially emphasized the importance of making efforts and playing one’s part earnestly every day.

On the train with Eloise, Walt told the conductor that “he couldn’t stand it was a man who didn’t look proud of his uniform.” This remark shows Walt’s view on a way of living, “to perform one’s duties earnestly” and “to live true to oneself,” which is based on the idea of ‘one hand clapping.’ In that moment, Eloise has a *satori* that she and Ramona are both lonely because they have lost

their loved ones. She also realized that she doesn't play her part as a mother, unlike Walt who lives true to himself. Thus Eloise is affected by Walt's teachings based on 'one hand clapping.'